

最優秀賞

## 「産む」という選択に感謝して

山梨県 山梨英和中学校三年 白戸 梨央奈

「来週の検診までに御家族でよく話し合って決めてください。」

超音波検査で一通りの説明を受けた母へ先生はこう言った。超音波検査で見た胎児だった私の脳は、ぽっかりと穴の空いたような空洞で、脳に病気の疑いがあるとのことだった。

翌週、再診となった。再診でも変わらず、「今後、詳しく検査をしないと重症度などは分からないけれど、妊娠中に亡くなってしまいう子もいるし、産まれてきても短命の子もいる。逆に産まれたら、全く障害がなかったなんてことも稀にある」。この時、病名までは伝えられなかったものの、もうすぐ中絶が可能な時期が過ぎてしまうとのこと、「産む」か「産まない」かの選択を迫られた。

母は病院から出ると真っ先に父へ電話をした。仕事途中で出られなかったけれど、この時すでに母の気

持ちは決まっていた、留守番電話にその気持ちを残し、次に祖母へ連絡した。先生から言われた説明を祖母にも伝えると、

「もう気持ちは決まってるの？」

「うん。どんな障害があろうと、私をママとして選んでくれたこの子を絶対に産みたい。」

「わかった。みんなで協力するから！」

そういう会話をしたらしい。そして、翌週の検診で「産む」ということを先生に伝えた。

お腹の外でそんなやり取りがされているとも知らず、私は母の温かいお腹の中のんびり成長していた。出産予定日を過ぎても、お腹の中が快適だったからか、全く産まれる心配がなく、妊娠四十二週目の日に陣痛促進剤を使用して出産することが決まった。

しかし、入院して陣痛促進剤を投与してからも、

なかなか分娩が進まず、促進剤の量を増やして、四十時間以上が経過して、ようやく産まれてきたらしい。出産の立ち合いには父だけでなく、助産師になるために勉強している学生さんが妊娠初期から付き添っていたので、その方も寝ずに立ち合ってくれた。妊娠期間、卵巣の腫れ、妊娠悪阻、逆子など、色々な事を乗り越えてくれた母。特に悪阻がひどく、会社も二ヶ月お休みさせていただいたそう。私が産まれるために、沢山の方の協力や支えがあって、今こうして生きていると思ったら、改めて皆へ感謝の気持ちでいっぱいになった。

もしあの時、「産む」という選択をしていていなければ、今現在私は、この世に存在しなかったし、この作文も書けなかった。大好きな家族や友達、先生とも出会えていなかったし、毎日美味しい物を食べて、笑って、楽しく暮らす日々も送れなかった。

私は「稀」にある、全く障害もなく元気に産まれてくることが出来た一人だ。私が生かされている意味を考えながら、日々一生懸命、一日一日を大切に生きていきたいと思う。

「大切に愛情いっぱいの中で育ててくれて、本当にありがとう！これからもよろしくね!!」

